

**古文書料紙原本にみる材質の地域的  
特質・時代時変遷に関する基礎的研  
究 ー平成6年度科研費補助金研究成果  
報告書ー**

富田正弘 研究代表

富山 1995.3

309p A4

本書は、平成4年度から同6年度までの3  
カ年にわたって文部省科学研究費補助金（総  
合研究(A)）を受けた「古文書料紙原本にみ

る材質の地域特質・時代的変遷に関する基礎的研究」の研究報告である。

研究代表者の富田正弘氏は富山大学人文学部教授で日本中世史の研究者であり、その以前は京都府立総合資料館に長く勤め、史料保存活動に邁進してきた。氏は京都府立総合資料館時代の東寺百合文書の整理・保存利用に関わられており、古代・中世の料紙についての素材としての紙の研究の基礎的研究はいまだ未開拓なことに気付かれたのがこの研究の動機であると推測する。料紙の研究方法が確定しているとはいえ、文献および産地ごとの製紙に関する技術研究はあるが、文献に表記されている紙名に対して、どの料紙が相当するのかという明確な判定ができていないのが現状である。その現状を発展・深化させるであろう初めての組織的・科学的な調査研究として注目される内容である。

本書は、第I部「研究調査の経過と概要」、第II部「研究報告編」、第III部「データ編」の柱を立てている。

第I部に調査研究の経過と方法が示されており、「古代中世人の紙の種類の見分け方を我々が会得する」ことを直接的目的と言い換えて(1)文献資料調査(2)文書料紙原本調査(3)文書料紙の光学的調査(4)文書料紙の科学分析(5)データのコンピュータ入力及び分析、の調査項目ごとに課題への取組をまとめている。ここでは文書の種類と紙の種類との相関関係、それぞれの様式の文書と料紙の種類の関係、身分の格差が料紙品質の違いに反映するか、などを見出す試みがとられている。

料紙のデータ集積は調査の主眼であり、機器・器具を用いて計測し、客観的データを取ることに努め、一寸当たりの簀目の本数、糸目の間隔などの詳細な測定を行っている。

現存文書料紙原本調査の結果解釈や調査方法に関する研究成果について、第II部に各研究分担者がまとめたのは次の9報告である。

湯山賢一 室町時代前期の「檀紙」(強杉原)を中心に  
永村 真 中世寺院における紙の利用

杉村一樹 正倉院文書における紙の表裏について  
綾村 宏 書状などの料紙の表裏の用法について—現段階での調査データの整理から—  
田良島哲 「小文」について  
増田勝彦 繊維と副成分による紙の性質—肉眼観察による料紙調査の留意点—  
高橋裕次 白粉入りの文書料紙に関する考察  
池田 寿 文書料紙における紙質と墨の種類について  
富田正弘 古代中世における文書料紙の変遷(総括に代えて)—文献にみる紙の名称の考察—

調査研究の概要において、この研究の限界と課題について「試行錯誤の連続で、残念ながら、研究成果として目指した目標に到達するにはとても及ぶべくもなかった」と自嘲され、本研究の中心的テーマである「地域的特質」と「時代的変遷」のうち「地域的特質」については全くといってよいほど手をつけられなかったとし、「時代的変遷」についてはやっとならぬ糸口が掘めた段階であり、その中間報告にとどまった内容であると自己評価をくだしている。「時代的変遷」の解明については、富田氏が総括に代えてと副題を付し、研究報告編の最後にまとめている。

青木睦・国立史料館